

本発表はプラトンの『ティマイオス』篇に見られるミーメーシス概念の特徴を明らかにし、その哲学史的な意義を指摘する。

プラトンは『ティマイオス』篇のコスモロジーにおいて、神的な「職人（デーミウールゴス）」が、永遠的で可知的な「模範（パラダイグマ）」を見て、万有を整えて作ったと述べている(48e6. Cf. 38a7, 39e2, 80b7)。その際、コスモスはパラダイグマの「模倣物（ミーメーマ）」であると描かれている。またさらに、神々——すなわちデーミウールゴスの子どもたち——と哲学者たちは、デーミウールゴスあるいは神的なものを模倣すると言われている(41c5, 42e8, 69c5, cf. 44d4; 47c2, 88d1, d7)。この宇宙的・形而上学的・存在論的ミーメーシスはプラトンのコスモロジーを理解する上で重要であることは言うまでもないが、加えて彼の芸術的思想のスコープを理解するための鍵であるとも、解釈者たちによって捉えられている。実際、Halliwell などの有力な解釈者たちは、『ティマイオス』においてデーミウールゴスはパラダイグマを写すという仕方での神的・哲学的な模倣製作（ミーメーシス）を行っていると考えている。そしてこのことを根拠に、ミーメーシスに属する詩作や絵画製作についても、神的・哲学的な種類のものがありうることを実はプラトンは認めている、と解釈している。これは『国家』篇における「詩人追放論」に見られるプラトンのミーシスについての立場とは明らかに一致しない。なぜならそこでプラトンは、ミーメーシスという営みを徹底的に批判し、模倣物とは真実とはかけ離れた存在であると論じているからである。したがって、こうした解釈者にとって、プラトンの文芸論は単一的に理解できない複数の局面を持っているということになる。

対して本発表は、『ティマイオス』篇におけるミーメーシス関連語群の用例を詳細に検討することを通じて、この対話篇に神的・哲学的な模倣製作や神的な模倣家を見出すのは困難であることを明らかにする。すなわち、『ティマイオス』篇において、パラダイグマに対応する模倣物、あるいはミーメーシス概念は、模倣家の模倣製作活動とは無関係であり、詩作や絵画製作の議論に還元できないことを示す。そして、ここでのミーメーシス概念は、この世界・万有が永遠的なパラダイグマに類同化するために、あたかも人間のように動的に振る舞う状況を描くために用いられていることを論じる。最後に、こうしたミーメーシスの意味・用法はプラトン以前には見られないにもかかわらず、新プラトン主義の序列的な存在論的世界構造を説明するための重要な装置として継承され、定着していったことを指摘する。